＜研究ノート＞

野球とサッカーの人気比較（明治期から現代）

高　垣　英　夫　　*Hideo TAKAGAKI*

A Comparison of Popularity between Baseball and Soccer in Japan since Meiji Era

1　はじめに

今から思い起こせば７年前、1993年５月15日、超満員の観衆で埋まった国立競技場、わが国にプロサッカーが誕生し、ついに、Ｊリーグ・ファーストステージが華々しくオープニングをした。それまでに、栄々着々努力した５年間、「綿密に練り上げられた戦略」[1] のもとに準備を進めてきた関係者の努力は、もののみごとに功を奏したのである。彼らの予想を遥かに越えた人気の沸騰ぶりは、バブルの崩壊で不況の淵にあった、日本経済に救世主誕生かと、それは賑やかにマスコミに報じられた。そして瞬く間に「Ｊリーグ効果」といわれる経済用語を日本国中に定着させてしまったのである。さらに、Ｊリーグをサポートする企業の広告看板やＪリーググッズが、「シーズン・スポンサーやオフィシャル・スポンサー」[2]、「ライセンシー（許諾権）およびサブライセンシー（再許諾権）」[3] といった、過去に全く馴染みのなかった言葉とともに、国民生活の中に飛び込んできたのである。翌年６月の新聞に、「Ｊリーグ大儲け、収入は予想の倍の88億円」[4] と報じられた、Ｊリーグ理事会発表の収支決算報告は ***Table 1*** のとおりである。

このように驚異的ともいえる、爆発的人気を生みスタートしたＪリーグであったが、２年目には早くも、ブーム沈静化の兆候が、明らかに現れ始めた。そして３年目のシーズンを終えると、各新聞紙上には「観客動員数の減少、テレビ

Table 1 Ｊリーグ収支の推移（1993～1997年度）

項　　目	93年度	94年度	95年度	96年度	97年度
収入合計	8,891	10,022	10,276	8,301	8,247
入会金、会費	634	690	706	727	831
放送権料	1,093	2,190	2,214	1,207	1,738
協賛金	2,310	2,961	3,799	4,681	4,422
商品化権料	3,601	3,588	2,099	934	753
主管試合入場料	1,129	457	691	474	262
その他	124	136	767	278	241
支出合計	8,834	10,083	10,350	8,338	8,242
クラブへの配分	6,147	7,647	7,364	5,385	4,808
事業費	2,258	1,860	1,971	1,910	1,853
管理費	319	401	1,120	1,002	1,475
その他	110	175	−105	40	106

※単位は100万円。93－96年度は実績で、97年度は予算。

読売新聞（1997年10月10日朝刊）より

視聴率の低下、期待はずれの地域活性化、年俸高騰による選手リストラ」などなどと、Ｊリーグの将来を危ぶむ記事が目立つようになった。さらに、５年目を終えた1997年には「ピンチのＪリーグ」[5]、６年目を終えた1998年には「Ｊリーグ挫折の危機」[6] と、Ｊリーグ崩壊を匂わす記事が特集として組まれるようになったのである。川淵三郎チェアマンは、「企業には、パトロンとして応援してほしい」とか、「自治体には地域に密着したクラブなんだからしっかりと支援してほしい」[7] と訴える。しかしながら、企業に頼り、自治体に頼るＪリーグ運営方式は、パトロン企業の撤退と自治体の税金投入に限界が見え始める中で、2002年の日韓共催、アジアでの初のワールドカップ開催という盛り上がりとは裏腹に、厳しい状況に追い込まれているのが現状である。

わが国のプロスポーツといえば、野球を筆頭に、先程のサッカー、相撲、ゴルフ、ボクシング、ボウリング、レスリング、競馬、競輪、競艇などが挙げられる。その中でも、国民の間で賑やかに比較され論じられるのが「プロ野球」とＪリーグとして発足した「プロサッカー」である。

そこで、本論では「真の国民的スポーツとは、その国の生活文化に密接に関わり合いながら、国民生活に自然に溶け込み普及し定着するもの」という視点から、わが国における野球とサッカーの普及ぶりを、「ベースボール」と「フットボール」として、わが国に紹介された明治史を中心に比較・検討を行った。そして、今後の両者の発展ぶりはどうなるのか。また、プロ歴8年目のサッカー人気が単なる「ビッグイベントブーム現象」といった、一時的なブームとして、果たして衰退し消滅してしまうのかを考察する。

2　明治時代における野球とサッカーの相違

野球とサッカーが、わが国に初めて紹介されたのは、1873（明治6）年のことである。野球は開成学校の米人教師ウイルソンとマジェットが、サッカーは英人海軍少佐ダグラスが、それぞれの紹介者と伝えられている。その時、サッカーはフットボールとして伝わり、その後の文献にも見られるように、今日のサッカーとラクビー、双方の試合方法が入り交じった状態で紹介されている。

また、野球とサッカーが、外来スポーツの競技方法解説書として初めて登場するのは、1883（明治16）年に東京大学予備門御雇教師F・W・ストレンジが著した「OUTDOOR GAMES」[8]の中である。同書には、ベースボール、ローンテニス、フットボール、操櫓術、アスレティックスポーツなど21種目の競技法[8]が紹介されている。続いて、1885（明治18）年には坪井玄道と田中盛業による「戸外遊戯法」[9]が、1898（明治31）年には大橋又太郎（編）「内外遊戯法」[10]が出版されている。これらの書物に紹介されている野球とサッカーの競技方法解説を見ると、当時の野球とサッカーのわが国における普及ぶりがよくわかる。特に、「戸外遊戯法」では、今日のサッカーとラクビーを区別せず「フートボール（蹴鞠の一種）」[9]として紹介している。このことは、フットボール発祥の地である英国のできごとと密接な関連がある。詳細は後述とし、今日のサッカーとラクビーのルールが入り交じり紹介されたのがわが国サッカーの始まりである。ようやく1898（明治31）年の「内外遊戯法」にして「蹴鞠」と付注し、「今日英国にて行わるフットボールに二流あり、一をフットボール流、

一をラクビー流（ユニオン流）とす」[10] とサッカーとラクビーの違いを明確に紹介できるようになったのである。したがって、わが国における今日のサッカーの始まりは、早くても、ラクビーとの競技方法の違いが明らかになった1898（明治31）年以降である。

3　野球の発展過程

1873（明治６）年にウイルソンらがわが国にベースボールを伝えた頃、米国留学から帰国した牧野伸顕や木戸孝正らが「なーに、あんなことなら、僕らだって、アメリカの学校でやっていたから知っている、僕が教えてやろう」[11] と開成学校でやり始めた。しかしながら、ベースボールとはいっても打者がバットを持って打つという程度のものである。本格的にベースボールチームが結成されたのは1878（明治11）年で、新橋鉄道局に勤めていた平岡熙（ひろし）による新橋倶楽部である。そして、1882（明治15）年にこの新橋倶楽部と駒場の農学校との間で、わが国最初の対抗試合が行われた。その後、東京府下の大学や中学校にベースボール部が組織され、わが国初期のベースボールが学校を軸に普及と発展の一途をたどり始めるのである。1895（明治28）年発行の第一高等学校校友会雑誌号外「野球部史」は、1885（明治18）年頃の様子を「農学校、明治学院、東京大学予備門が大いに奮起して技も大いに発達したが、新橋（アスレチック倶楽部）と争うまでにはいたらなかった。1887（明治20）年になり新橋倶楽部が解散し、ベースボール界はしばらく盟主を欠くこととなった」[12] と紹介している。この小冊子の中で中馬庚は井原外助らと相談し、「ローンテニス部を庭球とし我部を野球とせば大いに義に敵せりと信じて表題は野球部史とし…云々」[13] とベースボールを初めて野球と命名している。

その頃、俳人、正岡子規のベースボール好きは大変有名で、子規の学生時代（東京大学予備門～第一高等中学校）の実力ぶりについて先の一高部史は、「第一期の有様」の中で「Battery と雖（いえど）も今日の如く専業の士ありしにあらず技の勝れたる者を此の局に當らしめしは明治19年の寄宿新報に『赤組は正岡子規氏と岩岡保作氏と交互に Pitch と Catch とになられ云々』にて其他を

推すべし」[14] と紹介している。小説「山吹の一枝」や随筆「松羅玉液」をはじめ、子規の作品にはベースボールについての記述が見られる。「運動となるべき遊戯は日本に少し。（中略）西洋には其種類多く枚挙する訳にはゆかねども、（中略）愉快とよばしむる者ただ一つあり、ベースボールなり」[15] である。この中からも当時わが国に伝えられた西洋遊戯の中でも格別の思いをベースボールに寄せていることが伺われる。

また、正岡子規の親友の夏目漱石は、子規とは対照的に西洋遊戯はもとより運動というのがあまり好きではなかったと察せられる。1903～4（明治36～37）年のベースボール事情について、名作「吾輩は猫である」の「第8章落雲館事件」の中で、「吾輩はベースボールの何物たるかを解せぬ文盲漢である。しかし聞くところによれば米国から輸入された遊戯で、今日の中学程度以上の学校に行わるる運動のうちで最も流行するものだそうだ。米国はとっぴな事ばかり考え出す国がらであるから、近所迷惑の遊戯を日本人に教うべくだけそれだけ親切であったかもしれない。（中略）落雲館に群がる敵軍は近日に至って一種のダムダム弾を発明して、十分の休暇、もしくは放課後に至ってさかんに砲火を浴びせかける」[16] と、いささか厄介者扱いながらも、ベースボールが近所で盛んに行われていた様子を取り上げている。因みに、ここに登場する落雲館とは 郁文館中学のことである。1897（明治30）年には、「一高を破り東京府下の覇権を握った」[17] 野球の盛んな学校であった。

1905（明治38）年、早大野球部は渡米を敢行し各地を転戦した。その戦績にこそ見るべきものはなかったが、ベースボールの本場である米国から最新の規則と技術の知識を持ち帰ったのである。そして、帰国後、チームの主将を努めた橋戸信が著した「最近野球術」[18] は、新技術の紹介はもとより、投手板の位置や投手の軸足の解釈など、不確かな点がたくさんあった明治期の野球を近代野球へと案内してくれたのである。

また、ベースボール人気は、ただ単にプレイヤーだけに生じた現象ではなかったことに注目しなければならない。1889（明治22）年、一高と明治学院の試合の際、興奮した応援隊が起こした暴行事件（インブリー事件）[19] をはじめ、1906（明治39）年、「双方の応援団が熱狂している、此上試合をさするは危険

である」[20] と突如中止となった早慶戦にいたるまで、応援団や見物人の熱中ぶりが相当凄まじかった様子が伺われる。

4　サッカーの発展過程

「1850年代、イングランド各地ではそれぞれ独自のルールでフットボールゲームを楽しんでいたが、1863年、ロンドン・フットボール協議会において、フットボールのルール統一について論議をした結果、手を使ってもよいラグビー（ランニング・ゲーム）と手の使用を禁止したサッカー（ドリブリング・ゲーム）の２種類に分裂した」と、新修体育大辞典[21]にはサッカーの歴史が紹介されている。これによって今日のサッカーとラグビーのゲーム方法の違いが確立されていくわけである。が、サッカーはわが国にどのように伝わったのであろうかを述べる。

1873（明治６）年、わが国には、ダグラスによって紹介され、ストレンジの「OUTDDOOR GAMES」や坪井玄道らの「戸外遊戯法」によってその競技方法が紹介された。英国で、フットボールがサッカーとラクビーに分かれたのが1863年のことであるが、その22年後に発行された「戸外遊戯法」には、1863年以前のアソシェーション式でもなくラグビー式でもない、言うなれば旧式フットボールが紹介されている。例えば、「此遊戯に於て各組の目的は其鞠を敵陣即ち敵のゴール中に蹴りこまんことを勉め且己れのゴール中に蹴り込まるるを防ぐにあり故に其ゴール中に蹴り込まれたる組を以て敗者とす」[22] と記されている。これは、今日のサッカールールであり、「球を打ち或は投げ或は運ぶことの方法に由らずして之を敵のゴール柱間を通過せしめたるときは其ゴールを得たるもの即ち勝利者とす但高さは之を制限せず…云々」[23] とか「フェヤケアッチをなしたる者は他人の妨げを受ることなく其場所より自由に球を蹴ることを得べし…云々」[24] とあるのは今日のラグビールールである。

1898（明治31）年、大橋又太郎（編）「内外遊戯法」に「英国にて行わるフットボールに二流あり」と、フットボールの二分化と、サッカーとラグビーの違いが伝えられた。

このように明治30年代、ようやく「ア・式」と「ラ・式」フットボールの競技規則の違いが伝わり、東京高等師範をはじめ府下の学校に徐々に蹴球部が生まれ[25]、それ以後、東京高師の卒業生が地方の師範学校や中学校に赴任し蹴球を指導し全国に普及[26]していくのである。

しかしながら、「この頃の日本の学生が野球ばかりに熱中していてフットボールに関心を示そうとしないので、英国人教師は『ベースボールは、開国後まだ日の浅いアメリカに起こったもので、ヨーロッパではやっていない。ヨーロッパで広く行われているのはアスレチックやボートで球を使うものとしてはフットボールである。（中略）フットボールはイギリスでもフランスでも非常に熱心になっており、イギリス特有のクリケットもよい。狭い地域に限られたベースボールを行うより、ヨーロッパ全体でやっている球技を選んだほうが賢明である』と盛んにフットボールを勧めた」[27] と横浜スポーツ草創史にあるように、英国人教師をヤキモキさせるほど、外来スポーツの中では、ベースボールが抜きんでて人気を集めた。テニス、ボートの人気ぶりはまずまずだったが、フットボールは、サッカー、ラグビーのいずれにせよ、学生や生徒がチームを組織して行いはしたものの、1903～9（明治36～9）年の早慶野球戦に見られるような国民的人気はなかった。

やがて、ラグビー・フットボールは、ラグビーとしてわが国にその名を定着させ国民的認知を受けるようになった。しかし、アソシェーション・フットボールのサッカーは、ラグビーのようにフットボールを省略し、アソシェーションを通称名とすることにも、サッカーという名称にも馴染めないまま、昭和20年代の後半まで「蹴球」を通称名とした。

1918（大正７）年、第１回日本フットボール大会が開催された。が、すでに名称も競技規則も明確に分離されていたにもかかわらず、フットボール大会として、サッカーとラクビーを同時同場所で開催をしている。

1921（大正10）年に大日本蹴球協会が結成され、第１回全国蹴球選手権大会がようやくラグビーと分離し、単独で開催された[28]。1923（大正12）年には第１回全国高等学校蹴球大会が開催された。

5　野球とサッカーの人気比較

このように、野球もサッカーも、明治初期の同時期にわが国に伝えられた。そして、野球は明治30年代後半にはすでに熱狂的とも言える国民的人気を集め、弊害論まで飛び出し、新聞や雑誌紙上において賛否の論戦が繰り広げられた。一方、サッカーは、正式な競技名称や競技規則が明確でないまま明治の時代を経た。その後、大正時代に移り蹴球として協会が設立されたり全国大会が開催されたりしたが、野球のように特別な国民的関心をさほど集めることなく、どちらかと言えば外来スポーツの中でも人気の薄いスポーツとしてわが国スポーツ史に記されている。横井春野が「当時は、極端に西洋かぶれのした時代で西洋のものはなんでもよいとしていたので、野球をやると云うことは若き人々のプライドであったのである」[29]（日本野球戦史）と明治時代の気風について著している。だが、せいぜいその気風もテニスとボートぐらいまででフットボール（サッカーとラグビー）までは及ばなかった。サッカーが国民の注目を集めたのは 記憶に新しく、それは1965（昭和40）年に日本サッカーリーグを結成したときである。現在のＪリーグには及ばずとも、当時随分話題を集めて観客も多数競技場に押しかけた。

1968（昭和43）年、メキシコオリンピックでの銅メダル獲得は、わが国のサッカー史上において初めて熱狂的な国民的関心を集めた。その後しばらくは、釜本、杉山というスーパープレイヤーの人気に支えられ、「日本リーグのヤンマー対三菱戦には４万人もの観衆が押しかけた」[30] というほどのサッカー人気が続いた。しかしながら、それ以後にもワールドカップの本大会開催年に集まるサッカーの世界的人気に魅せられ、「ビッグイベントブーム」現象として一時的に国民の関心は集まるものの、低迷の一途を辿る日本リーグと世界に通用しない日本サッカーから、国民的な関心は徐々に遠ざかっていったのである（***Table 2***）。

世界の野球人口とサッカー人口を比較すれば、全く比較にならないほど、圧倒的にサッカー人口のほうが多い。「狭い地域（米国）に限られたベースボー

Table 2 主なＪリーグチームの観客動員数の変化（主催試合の１試合平均）

年　度	レッズ	ヴェルディ	フリューゲルス	ベルマーレ	エスパルス	全チーム平均
1993年前期	9.149	20.558	13.204	—	16.124	16.872
後期	13.770	29.913	17.724	—	20.800	19.077
1994年前期	20.631	30.385	21.791	17.678	16.543	19.679
後期	16.320	19.467	17.085	17.993	22.910	19.517
1995年前期	16.387	22.060	14.897	15.795	18.468	16.724
後期	22.732	19.608	16.707	16.427	21.026	17.120
1996年	24.329	17.653	13.877	10.483	12.962	13.353
1997年前期	20.808	12.435	10.341	8.912	10.239	10.611
後期	20.200	9.430	9.827	6.769	9.536	9.651

読売新聞（1997年10月７日朝刊）より

ルを行うより、ヨーロッパ全体でやっている球技を選んだほうが賢明である。」[31] と明治30年代に英国人御雇教師や貿易商人たちが言ったとおりである。

1997年の全国高等学校体育連盟調査によれば、所属生徒数の多いスポーツは、サッカー（16万人）、硬式野球（14万人）、バスケットボール男子（11万人）の順で、サッカーは野球を上回っている。学齢期における「行うスポーツ」としては、今やサッカーは野球を凌ぐ人気を得ていることは確かである。しかしながら、プロスポーツが純利益をあげ興行として成り立つ最大の要因は、何と言っても、そのスポーツを「見るスポーツ」としてファンの示す関心度であると確信する。

1998年に読売新聞社が行った社会人対象の「見たいスポーツ」世論調査（***Table 3***）[32] によると、プロ野球を見るのが好きな人は、調査対象者全体の54.6％であるが、プロサッカーのＪリーグはわずか21.1％である。高校野球と同サッカーを比較してみても、野球が33％であるのに対してサッカーはわずかに８％である。さらにその関心度となると、興味がないと答えたのは21％のプロ野球に対して、プロサッカーは47％にまで達している。

1992年から1998年までに行ったところの「見るのが好きなスポーツ」世論調査の結果が ***Fig.1***[33] である。種目としての大相撲・バレーボールは、調査年度が進むにつれ、極端に減少している。けれども、プロ野球は増大の傾向である。

Table 3 テレビ中継の好きなスポーツのアンケート

〔質問〕最近、いろいろなスポーツが行われ、テレビ中継も盛んです。あなたは、どんなスポーツを見るのが好きですか。次の中から、いくつでもあげて下さい。

スポーツ名	%	スポーツ名	%	スポーツ名	%
・プロ野球	54.6	・ボクシング	13.5	・水　泳	6.9
・大相撲	37.1	・スケート	12.3	・大リーグ（米プロ野球）	6.4
・高校野球	32.5	・テニス	11.5	・柔道・剣道	6.3
・マラソン	29.3	・体　操	10.2	・バスケットボール	5.9
・駅　伝	24.6	・プロレス・格闘技	8.8	・自動車レース	5.3
・プロサッカー	21.1	・競　馬	8.5	・アメリカンフットボール	3.0
・バレーボール	16.6	・高校サッカー	7.8	・その他	0.7
・ゴルフ	15.4	・陸上競技	7.4	・とくにない	10.3
・スキー	15.2	・ラグビー	6.9	・答えない	0.2

読売新聞世論調査（1998年３月８日朝刊）より

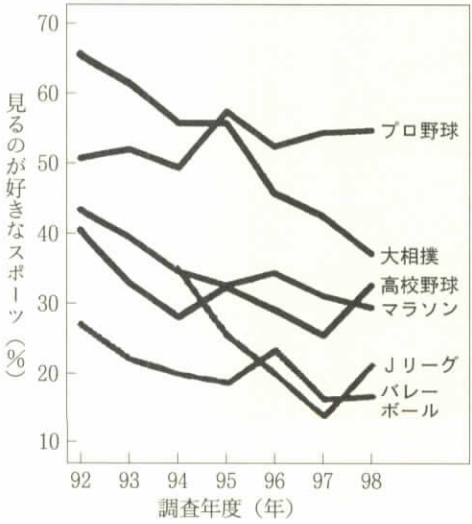

Fig.1 見るのが好きなスポーツ

※調査は92年は３月、その後は各年とも２月。
マラソンは95年まで「マラソン・駅伝」
読売新聞世論調査（1998年３月８日朝刊）より

プロ野球の人気は、Ｊリーグの２倍以上である。

このような結果から見ても、サッカーには、学齢期の「行うスポーツ」として野球を上回る人気があるものの、残念ながら「見るスポーツ」としてはＪリーグをしっかりと支えるだけの国民的支持を得ていないと言わざるを得ないようである。これは、正岡子規が「運動となる遊戯は西洋にはその種類も多く、無数の遊びがあるが特別に注意を引くほどのものはない、ただローンテニスには少し興味あるが、

幼稚で婦女子には適すが壮健活発な男子に愉快な遊戯と呼ばすには足らない。愉快と呼ばせるものがただ一つある。ベースボールである」[34] と言ったことと妙に合致している。日本人は、明治の文明開化がもたらした外来スポーツの中からベースボールを最も好んで抽出し、そのまま国民の生活文化の中に取り入れてしまったのである。

1936（昭和11）年、わが国のプロ野球（日本職業野球連盟）誕生は、「一応形態を整えたとしても世評は必ずしも新興の職業野球に対して同情的ではなかった。悪くいえば寧しろ、白眼視されていたと言ってよい位であった」[35]（野球大観）という状況であったのである。ゆえに、サッカーのＪリーグ誕生に画されたような綿密な戦略はおろか、観客を集める方策など何もなかったのである。それどころか、プロ野球創設の一因に「異常なほど熱狂的に関心を呼んだアマチュア野球は様々な弊害を露呈しはじめ、大学野球界はもとより中等学校野球界も腐敗の渦中に沈もうとしていた。学生野球の腐敗に頭を痛めた球界の先人たちは、学生野球と一線を画するプロ野球の創設こそが問題解決になると考えた」[36]（ベースボールの社会史）という、まさしく熱狂的で「ひいきの引き倒し」的な野球人気があったのである。つまり、入場料を払ってでも学生野球や中等野球を見ようとする野球観戦熱の高まりが、必然的に興行的な職業団野球を要求していたのであった。

6　おわりに

1932（昭和７）年、行き過ぎの学生野球に歯止めをかけるために、文部省は「野球統制令」を発令している。しかるに、わが国プロ野球の誕生は、「興行的な利益の採算よりも学生野球の興行化に歯止めをかけ、野球の健全な発展を図るのが狙いでもあった」[37] ことが注目される。まさしく、正岡子規が「ベースボール程愉快に満ちたる戦争は、他になかるべし」といって、多数ある外来遊戯の中で真っ先に飛びついた、無類の野球好きな国民性が、わが国のプロ野球を「自然羽化」のごとく誕生させた。

さて、サッカーはＪリーグ発足当時、「３、４年前まで日本で最も人気のな

いスポーツであった」[38] と関係者がもらすほど、明治以来の発展史から見ても、国民的スポーツというには、ほど遠いものであったのである。どちらかと言えば、人気の薄い外来スポーツであった。もちろん、7年前に国民の関心を巧みに引き寄せて、空前のサッカーブームを作りあげ、Jリーグを誕生させると同時に、大成功に導いた関係者の努力には大いに敬意を表したい。しかしながら、このJリーグ誕生は、プロ野球の誕生とは対照的に、温室の中での「人工羽化」による誕生であったと言えはしまいか。綿密で用意周到な画策とタイムリーなビッグイベントブーム現象に支えられ、企業と自治体の支援によって生まれた、というより、むしろ「作り出された人気」は、やがて、ブームの沈静化とともに衰退していくという危惧を抱かざるを得ない。パトロン企業の撤退や自治体の財政難で、たちまち存続の危機が叫ばれるような感じがするのである。言わば「親のすねかじり」的な組織運営は、営利を目的とする企業であるプロスポーツに関しては、とうてい許されるはずもない。ましてや、2002年のワールドカップ開催を契機に好転をなどと「ビックイベントブーム現象」を待ち望むような発想では、「ピンチのJリーグ」および「Jリーグ挫折の危機」どころか日本プロサッカー消滅の危機を速めるであろう。

〈参考文献〉

1）生方幸夫；『Jリーグの経済学』朝日新聞社、1994、P. 17
2）同上書、P. 30～35
3）同上書、P. 119～121
4）読売新聞朝刊、特集ピンチのJリーグ4（収支の推移）、1997. 10. 10付
5）同上紙、同特集1～5、1997. 10. 7～11付
6）同上紙、特集Jリーグ挫折の危機1～6、1998. 12. 8～13付
7）同上紙、同特集2、1998. 12. 9付
8）F. W. STRANGE；『OUTDOOR GAMES』1883
9）坪井玄道、田中盛業；『戸外遊戯法』1885、第17　フートボール
10）木村毅；『日本スポーツ文化史』ベースボール・マガジン社、1978、P. 120
11）同上書、P. 62
12）中馬庚；『第一高等学校校友会雑誌号外編、野球部史』1895、P. 2
13）同上部史、例言

14）同上部史、P. 3
15）木村毅（編）；『明治文化資料叢書（第10巻スポーツ編）』風間書房、1980、P. 248～249
16）夏目漱石；『吾輩は猫である』旺文社文庫、1965、P. 283
17）横井春野；『日本野球戦史』日東書院、1932、P. 37～38
18）橋戸信；『最近野球術』1905
19）横井春野；前掲書、P. 20～21
20）同上書、P. 92
21）今村嘉雄、宮畑虎彦；『新修体育大辞典』不昧堂出版、1976、P. 573
22）坪井玄道、田中盛業；前掲書、同項
23）同上書、同項
24）同上書、同項
25）岸野雄三；『近代体育スポーツ年表』大修館書店、1973、P. 99
26）日本体育協会（監修）；『スポーツ大事典』大修館書店、1987、P. 375
27）山本邦夫、棚田真輔；『横浜スポーツ草創史』道和書院、1977、P. 253
28）岸野雄三；前掲書、P. 128～139
29）横井春野；前掲書、P. 4
30）生方幸夫；前掲書、P. 69
31）山本邦夫、棚田真輔；前掲書、P.253
32）読売新聞朝刊、1998. 3. 8付
33）同上紙、同日付
34）木村毅；前掲書、P. 248～249
35）旺文社（編）；『野球大観』旺文社、1949、P. 82
36）永田陽一；『ベースボールの社会史』東方出版、1994、P.134～135
37）同上書、同P.134～135
38）生方幸夫；前掲書、P. 10
〔注〕）数字8，9，12，13，14，18，22，23，24は野球体育博物館（監修）；『復刻版／明治期野球名著選集』ベースボール・マガジン社、1980